

## 家庭科の男女共修を促進させるための一要因分析（第2報）

———大学生の生活実態と意識———

兵庫教育大 ○服部範子 青谷有美代 青野香織 菊澤康子

〔目的〕このたびの家庭科男女共修を推進するためには、教育現場の環境・条件をととのえることのみでなく、人々が現在どのような生活をし、そして、どのような生活意識をもっているかを把握しておくことも必要であろう。本研究では、調査対象を教育学部の学生にしぼったが、それはこの分析結果から、現代の若者の一動向を把握できるというのみでなく、彼らが教師予備軍として位置づけられるゆえ、将来の教師の意識についても、その傾向の一端を把握できると考えたからである。内容的には、彼らが現在どのような生活をし、今後に対してどのような生活像をもっているかを、とくに結婚・家族と職業生活との関連性に焦点をおいて分析する。この調査結果を検討することによって、家庭科教育の今後に関して、具体的な対応策を提起する一助にしたい。

〔方法〕1989年7-9月にH大学の3・4回生を対象としてアンケート調査を集合法で実施した。具体的には、各教室でアンケート用紙を配布して、その場で記入してもらい回収し、287票を有効票として分析した。

〔結果〕対象者の性別は、女性69.7%、男性30.3%、卒業後に学校教師を希望している者は60.3%である。今後の職業を選択する上で重視しているのは、第1に「自分の能力が生かせること」、第2は「収入」である。57.1%の学生は将来共働きを希望している。し実際の生活像では、33.1%は職業継続型、41.1%はM字型就労を予想している。しかし、仕事と家庭との両立のむずかしさや、家事育児の負担、そして自由時間がなく、仕事以外のことのできない点を、今後の生活上の障害要因になると考えている。